

若人に託した科学一等國の夢～昆虫男爵高千穂宣麿の生涯

保科 英人¹⁾

I. 帝国議会で吠える昆虫男爵

時は大正時代。「国立自然史博物館を建設せよ」「国立水産試験場を設置せよ」と、帝国議会で国立研究機関の充実を訴え続けた一人の虫屋貴族院議員がいた。その名を高千穂宣麿(たかちほ・のぶまろ)男爵(1864-1950)と言う(写真1)。

高千穂宣麿は英彦山神社(現在の英彦山神宮、福岡県添田町、写真2)の宮司を務める傍ら、英彦山を中心として採集三昧の生活を送った。彼の生涯を簡単にまとめると、元治元年(1864年)12月15日、幕末の動乱さなかの京都に尊攘派公家の徳大寺実則の次男として生まれた。明治3年、高千穂は父と共に京都から東京へ移住した。上京後、明治5年～7年まで訓蒙学舎で主にドイツ語を学んだ。その訓蒙学舎の閉校のち、明治7年に芳野金陵の漢学塾に移籍する。さらに明治10年には華族の子弟の教育を主目的とした学習院に入学した。

学習院入学2年後の同12年には学習院を退校し、翌13年に学農社に移った。さらに明治14年、高千穂は学農社から共立学校(現在の開成学園)に転学し、博物学で身を立てんと大学予備門入学を目指していたが、彼の人生に大きな転機が訪れる。明治16年徳大寺家を出て、九州福岡の英彦山座主の高千穂家の養子となり、英

彦山神社の宮司に就任する事が決まったのである。

宣麿は同年6月13日に高千穂家を継ぎ、同月28日には早くも宮司となった。翌17年7月、華族令制定に伴う公侯伯子男の五爵制度によって、高千穂は男爵の爵位を授けられた。大学で正規に博物学を学ぶと言う高千穂の夢は高千穂家に養子になった事で頓挫したわけだが、彼の博物学に対する情熱は終生揺らぐ事はなかった。高千穂は自然豊かな英彦山の地で動物採集に明け暮れる事となる。

明治30年5月29日、高千穂は後述する理由で英彦山神社宮司を辞職したが、翌31年10月19日には復職している。この宮司職を離任していた頃、彼は英彦山に昆虫学実験所を設立する計画を立てた。明治31年4月には昆虫学実験所敷地の工事を開始、明治33年建物の一部が落成した事を契機として、彼は高千穂昆虫学実験所を発足させた。

明治35年6月、高千穂は米国留学帰りの桑名伊之吉を英彦山に迎えた。高千穂昆虫学実験所は九州昆虫学研究所と名を変え、新たなスタートを切る事となる。しかし、僅か1年後の明治36年春には、桑名伊之吉が農商務省農事試験場に引き抜かれてしまい、九州昆虫学研究所は講習会などの事業を中断せざるをえなくなった。高

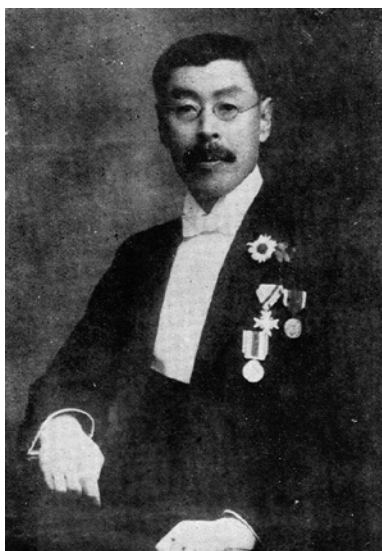


写真1 高千穂宣麿(大正4年当時)。



写真2 現在の英彦山神宮。

¹⁾ Hideto HOSHINA 福井大学教育地域科学部

千穂は落胆したが、めげる事なく昆虫の飼育や採集を続け、研究所を一人で支えた。

明治40年夏、彼は貴族院議員に選ばれた。再び英彦山神社宮司を辞任し上京する事となる。そして、東京では本職である議員活動に加え明治41年3月に西ヶ原の農商務省農事試験場嘱託となって害虫研究をも行う事となった。また、高千穂は研究活動に勤しむ傍ら大正6年3月設立の東京昆虫学会に対して準備の段階で多々援助を与えるなど、学界全体の発展にも心を配った。

明治44年7月任期満了に伴う貴族院議員選挙で高千穂は議席を失う。しかし、高千穂は東京に留まり続け、その4か月後の11月には東京帝室博物館（現在の東京国立博物館）天産部嘱託となり昆虫研究を継続した。

大正7年7月の貴族院議員選挙で高千穂は二度目の当選を果たした。大正13年3月、高千穂は東京帝室博物館の臨時天産部列品整理掛が置かれ、整理顧問に任命されている。

大正14年7月の選挙で彼は再び落選した。東京の邸宅を引き払った正確な年月日は不明だが、遅くとも翌15年の後半までには第二の故郷とも言うべき英彦山に引き揚げた。彼は同地で再び採集三昧の生活をおくる事になる。

昭和10年、高千穂は私有地一万坪と自らが収集した標本を九州帝国大学に寄贈、翌11年には福岡県出身の実業家の中山悦治によって同地に造られた建物が九大に寄付された。これが九州帝国大学附属彦山生物学研究所で、同年10月20日秋晴れの日に開所式が挙行された。

戦後、高千穂は昭和24年に昆虫学会への貢献が大であるとして日本昆虫学会の名誉会員に推戴されたが、翌25年12月23日86歳で逝去した。なお、昭和46年に彦山生物学研究所は九州大学農学部附属彦山生物学実験所と改称されたが、残念ながら平成10年に実験所としては廃止された。実験所の建物は彦山生物学実験施設と名称変更され、今や専任教員を持たず、学生実習等の



写真3 現在の九州大学農学部附属彦山生物学実験施設。

ための大学施設として維持管理されるにすぎなくなったが、今なお高千穂が愛した英彦山の地に建っている（写真3）。

純粹に学問実績として見た場合、高千穂が発表した諸論文は、同時代に生きた桑名伊之吉や佐々木忠次郎ら近代を代表する昆虫学者のそれと比ぶべくもない。むしろ、高千穂の日本の昆虫学界への大きな貢献は、明治33年英彦山に設立した高千穂昆虫実験所や、昭和11年に多くの標本とともに九州帝国大学に寄贈された附属彦山生物学研究所を創設した事など、ハード面の提供にある。総合的に見て昆虫学発展に寄与した高千穂の業績は頗る高く、逝去の前年に昆虫学会名誉会員に推されたのは明明白白と言わねばならぬ。現在、九州大学は日本の昆虫分類学を牽引する一方の旗頭であるが、その源流の一つは高千穂の博物学精神にあると言っても過言ではあるまい。

II. 史料として疑問符が付く『鶯嶺仙話』

高千穂宣麿の略歴を表にした。これまで一般人が手軽に調べられる高千穂の略歴と言えば、『殿様生物学の系譜』（朝日選書）にも収録されている小西（1990）の概説がほぼ唯一のものであった。しかし、筆者の手による文章末の表の高千穂の履歴と小西（1990）の概説は基本的には同じとは言え、異なる点も多い。本稿（I）で記した高千穂の履歴の各事項の年代も微妙に小西（1990）のものとは差異がある。もちろん、筆者の立場では「本稿の方が正しい」と言わざるを得ない。

博学で知られた故小西正泰氏の高千穂宣麿の概説に誤りが多いのは、小西が報文を書く際に基礎資料とした『鶯嶺仙話』（高千穂、1946）の記述がそもそもいい加減だからである。残念ながら大半の昆虫学者は史料批判と言う概念を持っていない。ただ、高千穂の生涯を追跡する際に『鶯嶺仙話』以外に資料がない事績については、これに無条件に従わざるを得ない事も付け加えておこう。

『鶯嶺仙話』とは、高千穂宣麿の口述回想談を主に九大昆虫学教室初代教授の江崎悌三がまとめた高千穂の自伝である。つまり、本の表紙には“高千穂宣麿”との著者名が記されているものの、実質的編著者は江崎である。よって、『鶯嶺仙話』の記述に誤りがあると指摘するのは、江崎悌三の著述内容が間違っていると言うに等しい。九大虫屋の系譜の末端に位置する筆者としては、江崎批判は神をも恐れぬ所業であるが、事実は事実として正さねばなるまい。

筆者は無駄としか思えない1年以上の調査期間と少なからぬカネを使って、高千穂宣麿の小伝を発表した（保科、2015）。本稿は言わば拙文から高千穂の事績の一部のみを抜粋したものである。拙文で引用した参考文献や資料名は本稿では省略した。根拠文献や高千穂の全

生涯を知りたい物好きな方は保科 (2015) を参照していただきたい。ただ、(IV) に関しては保科 (2015) 発表以降に新たに発掘した資料に基づいた章なので、(IV) で引用した文献資料については全て本稿末尾に列記してある。

なお、本稿で「高千穂の回想によると～」「自伝によると～」「鶯嶺仙話」によると～」等の記述は全て高千穂 (1946) を指し、以後逐一引用しない事をご承知願う。

III. もしかしたら日本最大の私立昆虫学研究所が建てられていた?

歴史学者気取りのライターによる「こうすればカルタゴのハンニバルはローマを落とせていた」「こう戦えば関ヶ原の戦いは西軍が勝っていた」等の駄作は枚挙にいとまがない。史学の世界では if を書き連ねる事に意味はないとされるが、所詮筆者は歴史学者に非ず。戯文と自覚しつつ高千穂にまつわる if を書いてみよう。

前述の通り、高千穂宣麿は公家の名門の徳大寺家に生まれ、明治 16 年に高千穂家に養子に入った。妻は四辻家 (のち室町家) の令嬢なのでいわゆる婿養子ではない。保科 (2015) は養子縁組に至る過程の一端を明らかにしたが本稿では詳細を述べない。ここでは、五撰家の一つ鷹司家の斡旋があって宣麿の高千穂家入りが成立したとだけ申し上げておこう。

養子縁組成立までの交渉の中で鷹司家は「徳大寺家には別の京都在住の別の御曹司もいるが、こちらの方は一条家の方に養子が決まっているようだ」との情報を高千穂家側に漏らしている。京都在住中の徳大寺家の子息とは徳大寺隆麿の事で、宣麿から見て叔父にあたる。もっとも叔父と言っても隆麿と宣麿はほぼ同じ年月日に生まれているので同年齢だ。明治 16 年当時、一条家が養子を探していたのは事実だが、実際に同家に養子に入るのは四条家出身の實輝である。鷹司家が掴んでいた情報の真偽は不明だが、結果的に徳大寺隆麿が一条家の養子にならなかったのは厳然たる事実だ。

筆者はここでどんな妄想まみれの if を披露したいのか。一条家入りが内定していたとの話がある徳大寺隆麿は後に財閥住友家に養子に入り、友純 (= 春翠) と名乗った。つまり、歴史の歯車が 2 つも 3 つも違えていれば、隆麿が高千穂家に入り、一方の宣麿が住友家を継いだのではないか。さすれば、住友財閥の財力を背景に、世界に冠する私立昆虫学研究所が建設され、その研究所は今も日本の昆虫学をリードしていたかもしれない……このように全く無意味とは承知しつつ空想を膨らませるのは良い暇潰しにはなる。もっとも、虫の事しか考えない宣麿を住友財閥の指導者として戴いたがために、平成の世に“住友”との名を冠する企業は残っていないはず、と冷笑する事も可能である。

IV. “狩猟名人” との評価の裏側で

高千穂宣麿は動物学者の波江元吉をして「(高千穂氏は) 銃猟巧妙」と言わせるだけの狩猟技量を有していた。高千穂が収集した鳥獣類剥製標本の数はかなりの数に上ったはずだが、残念ながら高千穂自身が捕ったと確認できる鳥獣類標本は、現在の九大農学部附属彦山生物学実験施設には残されていない。

さて、狩猟に関して高千穂はやや「おいたが過ぎた」事がある。平成 28 年年明け、筆者は国立公文書館所蔵「男爵高千穂宣麿犯罪処分ノ件」(公文雑纂・明治二十二年第十一巻・司法省一) との文書を開覧した。「高千穂宣麿公は彦山生物学研究所を作った偉い人」との観点を持つ九大虫屋関係者からすれば我が目を疑う資料名だ。なお、この資料については従来虫屋の間で存在が全く知られていなかったものなので、本稿末にて全文を掲載する事とした。

もっとも罪状の内容は「高千穂ならさもありなん」と称せる 2 件である。一件目は高千穂が銃猟免許を取得したのは明治 22 年らしいのだが、その前年の同 21 年 4 月に銃で猟を楽しんだ事。要するに無免許狩猟である。二件目は免許取得後に銃猟禁制の場所、つまり禁猟区や人家付近で銃をぶっ放し、これまた違法な猟をした事である。残念ながら明治 21 年時の英彦山神社の記録日誌は失われており、無免許銃猟の詳細については判然としない。翌 22 年分の日誌は現存するも筆者の力量では読解しきれず、二件目についても高千穂がいつ法律違反をやらかしたかは特定できない。ただ、同 22 年 5 月 13 日には小倉軽罪裁判所から高千穂家の家扶の出頭指示が神社に届いている事が読み取れた。これが高千穂の法律違反に関する事情聴収だったと思われる。この推測が正しいとすると、明治 22 年は 3 月初旬から 4 月末まで宣麿本人は東京に滞在していたので、彼が人家近くで銃をぶっ放したのはこの年の 1 月か 2 月あたり、と言うのが妥当な計算になろう。もっとも法律違反が地元民にすぐにバレて即座に官憲に通報されたとすれば、5 月初旬に違反をやらかしたと考えるのも不可能ではない。

明治 9 年 5 月 24 日太政官達「華族懲戒例」第一条では「華族ハ国民中貴重ノ地位ニ居ル故ニ、其過失或ハ体面ヲ汚スモノハ仮令法律ニ触レサルモ仍ホ之ヲ懲戒ス」と定められている(霞会館諸家資料調査委員会編, 1985; 酒巻, 1987)。ようするに“ノブレス・オブリージュ”と言うやつだ。高千穂がしでかした事は微罪ではあり、「華族懲戒例」第二条が定める譴責、謹慎、蟄居の重い処分を食らう事はなかった。

しかし高千穂は華族である以上、事件処理について一般人のように簡単にはいかない。福岡軽罪裁判所小倉支庁検事の藤崎又三は、山田顕義司法大臣宛の明治 22 年 6 月 26 日付報告で、1) 高千穂に対しては罰金刑を処

する事が妥当である事, 2) 事実確認のため被告人(=高千穂)の出廷の必要がある事, 等を進言した。結局, 山田法相の明治天皇への上奏は同年7月16日になされ, 翌17日には裁可を得ている。ちなみに, この時の明治天皇の侍従長は高千穂の実父の徳大寺実則。徳大寺は息子の不祥事に「何やってんだよ」と頭を抱えたのであろうか。

さて, この頃高千穂及び英彦山神社は別の揉め事を抱えていた。英彦山神社と小倉の教派神道・神理教との間の英彦山教会に関する激しい論争が起っていたのである。弱り目に祟り目とはこの事か。

英彦山教会とは何か。明治維新直後の神仏分離で英彦山神社は旧檀那を失い, 同神社と旧修験者は経済的打撃を受けた。英彦山教会とは英彦山を中心とした宗教組織の再結集を目的とした組織で, 明治13年2月に開設届を福岡県令に提出するに至ったが, 内部対立により同15年には崩壊した(須永, 2015)。

しかし騒動はそれで収束しなかったらしい。その後の揉め事については, 現在九州産業大学の須永敬准教授が研究を進められており, 筆者が本稿にて言及するのは差し控えていただく。ただ, 明治22年7月, つまり高千穂の無免許銃猟処分云々とほぼ同じ時期に, 英彦山神社は英彦山教会に関連した裁判に巻き込まれていた, とだけ述べておこう。あと, 高千穂が無免許銃猟に関する検事の事情聴取に応じたか, つまり本人がおとなしく小倉の裁判所へ出頭したかについては定かでない事も付け加えておく。

ただ, 司法大臣の上奏が裁可された以上, 高千穂が狩猟に関し犯罪処分を食らった事は確かだが, 自伝『鶯嶺仙話』は知らぬ存ぜぬ, そんな事は一言も触れられていない。“狩猟名人”高千穂としては情けない話ではある。

筆者は保科(2015)にて「大正10年の第45回帝国議会の『狩猟法中改正法律案特別委員会』の委員になぜ高千穂が選出されなかったのだろうか?」と疑問を呈した。委員会委員の指名権を事実上独占していた徳川家達貴族院議長が, 明治21年4月の高千穂の無免許銃猟の“悪事”を承知していたかは不明だ。だが, 現代の観点から言えば, 高千穂が狩猟法中改正法律案を審議するのは倫理的にやや問題がありそうで, 徳川議長が高千穂を委員会メンバーから外したのは結果的に正しかったと言う事になる。

V. 仕事をサボって虫捕りした日本人第一号

タカチホヘビの名は九州高千穂地方で発見されたからではなく, 高千穂宣麿が日本人として初めてそのヘビを捕った事に由来する, と言うのは知る人ぞ知る逸話である。また, 珍鳥ヤイロチョウを撃つ事に成功した最初の日本人も高千穂であるらしい。しかし, 高千穂は三個月

の日本人第一号の勲章を得る事ができるようだ。それは「記録で確認できる, 仮病を使って仕事をサボって虫捕りに行った最初の日本人」と言うものだ。

明治27年6月19日, 高千穂は「宿病有之転地療養ノ為メ来ル七月十日ヨリ往復ヲ除キ五十日間東京地方江旅行」の申請書を福岡県庁経由で内務大臣宛に送った。ようするに病気による50日間の欠勤届を提出したわけである。英彦山神社のような官弊社の神官は言わば国家公務員なので勝手に長期休暇を取るわけにはいかない。

しかし, これは全くの仮病である。なぜなら高千穂は上京後に浅間山へ登り, 同山中で数日を過ごすと言う過酷な昆虫採集をしているからである。高千穂は『鶯嶺仙話』の中で「(浅間山で)ミヤマオツネンテフをたくさん採集することが出来た」などと無邪気な感想を述べているが, 伝記編集のためにこの回想を口述筆記した江崎梯三九州帝国大学教授も, まさか目の前にいる高千穂が仮病を使ってまで虫捕りしていたとは夢にも思わなかっただろう。

「いやいや, 高千穂は確かに病気治療で上京したはずだ。しかし, 東京で体調が回復したから昆虫採集に行ったのだ」と超好意的な見方をしたくなる人もいるかもしれない。しかし, 残念ながらその見方は成り立たない。と言うのも, 高千穂は上京前にわざわざ福岡“鹿ノ嶋”(志賀島の事か?)に立ち寄り海産動物の採集を楽しんでいるからである。高千穂の宿病(=持病)とは「昆蟲採集激甚渴望症候群」だったとしか思えない。

幸か不幸か高千穂が英彦山を留守にしている明治27年7月, 日清戦争が勃発。官弊小社の英彦山神社は現代風に言えば国家機関なので, 戦争協力は言わば業務の一環である。8月7日, 英彦山神社は直ちに戦勝祈願の臨時祭典の執行を決定するが, 高千穂宮司様は“虫捕り”で不在なのでやむなく宮司代理が役目を務めた。

虫捕りで留守にしているだけならまだ救われる。その頃, 国家の一大事に我らが高千穂は何をしていたかと言えば, 東京でカネを使いすぎたらしく, 「帰りの旅費が足りないから20円送って」と神社側に要求して来る始末。結局, 高千穂が英彦山に戻った8月18日には日清戦争の初戦の山場は終わっていた。高千穂宮司は何の役にも立たなかったわけである。英彦山神社の人々の「何でこんな人を養子に貰っちゃったんだろ」との嘆息が聞こえてくるようではないか。もちろん, 平成の虫屋からすれば, 「仮病を使ってでも虫を捕りに行く」なんぞは名誉でありこそすれ, 恥ずべき事では断じてない。

VI. 誤りが多すぎる『鶯嶺仙話』の貴族院議員時代の記述

『鶯嶺仙話』が事実を最も正確に伝えていないのは高千穂宣麿の貴族院議員時代に関する箇所である。本稿では主要な5つの誤り, ないしは恐らくは意図的な事実隠

しを指摘しておこう。

まず、明治 23 年、すなわちアジアで最初の国会が大日本帝国で開かれた年であるが、高千穂は英彦山神社宮司を辞任する事を決意した。目的は貴族院議員に当選するためである。辞表は福岡県庁を経て内務省に進達されたが、その後この辞表がどう扱われたかは不明だ。結果的に彼は辞任していないので、辞表はどこかの段階で却下されたか差し戻されたはずである。第一回帝国議会開会の段階で高千穂が貴族院入りしようと画策した事について、『鶯嶺仙話』は全く言及していない。

次に自伝は明治 30 年に高千穂がつくづく嫌気がさして宮司を辞任したとあるが、本当の理由は同年 7 月の貴族院議員選挙に打って出るためだ。解散がない貴族院議員の任期は 7 年なので、明治 30 年は必然的に貴族院議員選挙の年と言う事になる。『鶯嶺仙話』が語る明治 30 年の宮司辞職の理由は意図的に真相を隠蔽しているわけだ。

高千穂のこの時の宮司辞職の意志は強かった。高千穂は明治 30 年 5 月初旬には東京の方へ辞任の意思を伝えており、同 5 月 7 日には東京から「辞職表は福岡県庁に出すように」との指示を受け取っている。事実かどうかはともかくとして、7 年前の明治 23 年に宮司を辞められなかったのは福岡県庁の阻止にあったから、と高千穂は認識していたのではあるまいか。よって、明治 30 年の貴族院議員選挙では万全の手を打つべく福岡県庁を頭越しに先に東京の方へ直接辞職を働きかけていたのではないか、と言うのが筆者の憶測である。

結局、高千穂は宮司職そのものは無事辞める事ができたものの、貴族院議員選挙には落選した。さて、ここでも無意味な if を語る事ができる。仮に明治 30 年の段階で高千穂が議員選挙に当選し、東京へ行ってしまっていたらどうなっていただろう？まず桑名伊之吉が明治 35 年から翌年まで在籍した九州昆虫学研究所が存在しなかった事は確かだ。この九州昆虫学研究所と後の九州帝国大学附属彦山生物学研究所との間に直接の系譜関係はない。しかし、高千穂が明治 30 年の時点で東京にしっかりと生活基盤を築いたとすれば、後に彦山生物学研究所が世に送り出されなかった可能性は小さくない。同研究所が九大農学部昆虫学教室、ひいては日本の昆虫分類学進展に与えた恩恵少なからぬ事実を鑑みると、九大虫屋の筆者は「高千穂がこの時落選してよかった」と思わずにはおれない。

三番目に、高千穂は明治 40 年に貴族院議員に選ばれたから宮司を辞めたかと回想するが、正しくは同年 6 月 14 日にまず宮司辞職、そして同 8 月 3 日に補欠選挙で当選である。つまり順番が逆なのである。

四番目に、高千穂は叔父の西園寺公望が首相になったのを契機として貴族院議員になったと言うが、これも

明らかにおかしい。と言うのも、伯爵・子爵・男爵議員はそれぞれの爵位保持者による互選で選ばれるからだ（注、公爵と侯爵は選挙を経る事なく自動的に貴族院に籍を与えられる）。したがって、首相と言えど当時侯爵だった西園寺が（のち公爵）男爵議員選挙に直接関与できるものではない。また、高千穂は受け身で議員になったのではなく、運動費を使ってまで当選した事が明らかになっている。

最後に、『鶯嶺仙話』を読む限りでは、高千穂の明治 40 年から大正 14 年の東京在任期、彼はずっと貴族院議員だったと読者は解釈してしまう。しかし、明治 44 年の任期満了に伴う選挙で高千穂は落選、次の大正 7 年の選挙で二度目の当選をしているので、彼の議員在任期間は正しくは「明治 40 年～明治 44 年及び大正 7 年～大正 14 年」となる。つまり、『鶯嶺仙話』巻頭の彼の写真及びそれを引用した小西 (1990) の「貴族院議員時代 大正 4 年」との説明文は明らかに間違いだ。高千穂の議員在職期については、多くの公立図書館で閲覧できる『議会制度百年史』（衆議院・参議院編、1990）等の書籍でも「明治 40 年～大正 14 年」と誤記されているので余計に始末が悪い。ちなみに高千穂のために弁護するなら、彼が明治 44 年の選挙で落選したのは、個人的資質がどうのこうのと言う話ではない。単に高千穂が所属していた政治党派の木曜会が選挙で大敗した結果である。

『鶯嶺仙話』では、高千穂は大正 2 年に東京帝室博物館出仕となったと記すが、正しくは明治 44 年 11 月だ。そして、おそらくは博物館出仕時期は同年 7 月の選挙で彼が落選した事と関係がある。議員歳費を失った高千穂は日銭を稼ぐ必要もあって博物館嘱託となったのだろう。ちなみに博物館嘱託の彼の月給は 20 円だったそうである。

『鶯嶺仙話』の上記の誤りの詳細については保科 (2015) を参照していただきたいが、ここでは二度にわたる宮司辞任の時期についてだけ解説しておこう。明治 30 年 7 月及び明治 40 年 8 月の議員選挙直前に、高千穂が宮司を先に辞任していたのは明確な理由がある。それは貴族院議員選挙において神官は被選挙権を持たないと規定されていたからである。

つまり自伝にある「余はそれまで英彦山神社宮司の職にあつたが、この機会（注、貴族院議員になった事）に之も嗣子俊麿に譲り辞任した」との彼の回想は明らかに取り繕って書かれたもので、正しくは「余は貴族院議員に当選する為に予め宮司を辞めておいたのだ」としなければならぬ箇所である。

戦前に教育を受け当代随一の知識人だった江崎悌三は貴族院議員選挙の仕組みの大凡は承知していたはずだが、被選挙権の規定にまではさすがに思いが及ばず、伝

記編集の際に疑問を抱かなかつたのかもしれない。

VII. 帝国議会における高千穂宣麿

明治 23 年と明治 30 年の両年に貴族院議員に当選すべく画策するも果たせず、執念実って明治 40 年の補欠選挙でようやく念願叶った高千穂宣麿であるが、帝国議会における彼の議員活動は活発とは言えない。本議会で国務大臣に論戦を挑むなどの行状は見せていないからだ。しかし、高千穂は各委員会で行くつかの渋い発言を残している。本稿では彼が国立研究機関の充実を強く主張していた事実を紹介しよう。

第 41 回帝国議会会期中の大正 8 年 2 月 25 日の請願委員会にて、この日、「水産試験場設置ノ請願」が審議された。その摘要は、現在水産の試験は水産講習所及び各府県立水産試験場が行っているが、相互の連絡を欠き試験方法の統一がない。また経費が不足し良好な結果が得られていない。よって、全国を数区に分け、各区に国立水産試験場を設けてほしいと言う請願である。しかし、政府委員の村上隆吉（農商務省水産局長）はどちらかと言えば請願採択に消極的な姿勢を見せた。

請願委員会の委員だった高千穂曰く、日本の近海の調査は全て外国の資産家なり学者によって行われ、その調査報告が現在の日本の水産業の重要な資料となっている。これは一等国として恥ずべき事である。現在の水産講習所は漁業者を育成する場に過ぎない。水産研究の脳髓となるべき研究者については、今後、大学から優秀な人材が大量に供給されるであろうから心配する事はない。また、そう言った人材の活動の場を確保するためにも国立水産試験場を設けるべきだ、と主張した。

研究機関構想に関して高千穂が最も高い見識を披露したのは同じく第 41 回帝国議会の時である。大正 8 年 3 月 10 日「工業原料植物研究所設置ニ関スル建議案」が議事に上がった。発議者は徳川頼倫侯爵以下 7 名、賛成者は蜂須賀正韶侯爵以下 45 名である。この建議案は文字通り工業用の原料植物を研究する国立機関を設置せよと言うものである。議案は特別委員会に付託される事となり、徳川家達議長の名で高千穂は委員の一人に選ばれた。

「工業原料植物研究所設置ニ関スル建議案特別委員会」は大正 8 年 3 月 17 日に開かれた。本会議で建議案の論壇に立った三宅秀議員は、特別委員会のメンバーではなかったが、委員会に出席し冒頭でも建議案の説明を行った。この三宅秀は嘉永元年生まれ。漢学、蘭学、医学等を修め、のちフランスに留学、帰国後は医科大学教授や医科大学長などを歴任した医学博士だ。おそらくは発議者議員の中で学術理論面での中心人物であったと思われる。

学歴で言えば、学習院中退の高千穂は医学博士の三

宅に遠く及ばない。しかし、そんな事でひるむ高千穂ではない。高千穂は三宅に問う。「なぜ工業原料を植物に限るのか？」と。三宅からすれば妙な質問だ。高千穂は「昆虫の中にも工業材料を生産できるものがあるではないか。例えばカイガラムシの一種がこしらえるロウ物質は建築材料にも応用できる。新施設の研究対象を植物に限った理由を述べよ」と畳みかけた。三宅は動物もまた植物と同様に工業原料となりうる事は認めたものの、動物の生産物を代替できる植物はある、とあくまで研究対象は当面植物に限定すべきとの考えを繰り返した。

高千穂はこれ以上「新植物研究機関は昆虫をも扱うようにせよ」との自説にはこだわらなかったが、その後彼の主張は全く別方向に向かう。高千穂は言う。外国では植物研究のような仕事は博物館で行われている。日本国民の中には博物館とは標本を収集し陳列する場所だと考えているものがある。しかし、博物館はそういう施設ではない。博物館の本来の仕事はまずは学術研究、そして社会教育のはずである。つぎに高千穂は改めて「工業原料植物研究所設置ニ関スル建議案」に賛意を表明した後、「(自分の) 眼目ハ博物館ノ中ノ天産博物館、其中ノ植物研究所ヲ拵ヘルト云フ意見デ以テ此植物研究所ヲ賛成スル次第デアリマス」と述べ、「国立ノ天産博物館ト云フモノガ出来テ其博物館ニ於テ総テ斯ウ云フコトヲ研究スルコトガ出来マシタナラバ初メテ一等国タル日本国ヲ樹立スルコトガ出来ルダラウ」と締めくくった。つまり、高千穂の真意は工業原料植物研究所建設への単純な賛成ではなく、まずは国立天産博物館を設置し、その付属研究機関として工業原料植物研究所を設けよと要求する事であった。

高千穂は帝国議会特別委員会の中で「国立自然史博物館を作れ。それなくして何が一等国か」と堂々と主張したのである。高千穂のこの見識は高く評価されるべきものであろう。同時に、博物館活動の構成要素は標本収集、保存、調査研究、教育活動の 4 つが柱とされるが（倉田・矢島, 1997）、彼もまた同様の見解に至っていた点も見逃せない。

もう一つ筆者が特筆しておきたいのは、高千穂は一連の委員会の中で日本の若手動物学者の能力が非常に高い事を紹介し、彼らの才能を生かすポスト確保のためにも国立研究機関が必要と訴えている点だ。高千穂は東京帝大の石川千代松や佐々木忠次郎といった動物学・昆虫学関連の教授連と親交を持っていた。おそらくは大学研究室で彼らの教え子たちに接する機会があったのだろう。高千穂自身は大学で博物学を学ぶと言う希望を絶たれたが、日本を科学一等国にする夢を次代の学者たちに託したのである。

VIII. 昆虫男爵の晩年

自伝『鶯嶺仙話』は、昭和 11 年末を以て自らの履歴を語り終えた形となっている。しかし、高千穂はその後も 15 年近く生きた。筆者は伊藤修四郎博士（大阪府立大学名誉教授）の貴重な証言によって、これまで全く文章に残っていなかった高千穂宣麿の最晩年の様子を知る事ができた。

大東亜戦争当時、九州帝国大学農学部昆虫学教室の学生は、彦山生物学研究所で宿泊する行き帰りには必ず高千穂の自宅を訪問し挨拶する事になっていた。学生たちの高千穂邸訪問はあくまで挨拶であって家に上がって話し込む事はなかったが、高千穂は学生の訪問を大変喜んだ。

昭和 19 年 9 月 15 日、伊藤修四郎博士は戦時特例の就学期間半年短縮で九州帝大農学部を卒業された。卒業の翌日には副手嘱託となり、同年 11 月 30 日付で九州帝国大学附属彦山生物学研究所の事務嘱託（兼務）を拝命、これより伊藤博士は高千穂に会う機会を幾度となく持たれる事となった。

正妻の芳子夫人に先立たれていた宣麿は、高千穂家本邸とは別の家屋で、後妻の立場の女性と一緒に暮らしていた。英彦山の測候所の前にあった高千穂の住まいは豪邸とは言い難い平屋で、使用人や女中はおらず質素な生活であった。伊藤博士は高千穂のこの自宅に招かれ食事を御馳走になる事もあった。高千穂は昆虫学を志す若者の来訪を大歓迎した。

高千穂の後妻的立場の女性と江崎悌三教授のシャルロツテ夫人は直接交流を持っていた。高千穂家と江崎家が一緒に写った写真も残っている（写真 4）。伊藤博士は江崎邸を訪れた際、シャルロツテ夫人から「高千穂男爵の奥様から、お菓子の作り方を教えて欲しいと頼まれています」と言われ、レシピを紙に書き取り英彦山に届けた経験があると言う。



写真 4 江崎悌三と高千穂宣麿。中央が江崎、向かって右が江崎シャルロツテ夫人。一番右が高千穂。昭和初期頃（鈴木瀬奈氏所蔵）。

高千穂は晩年英彦山の一角にある豊前坊高住神社の神官を務めていた。しかし、邸宅から遠く離れた豊前坊高住神社に向かうには、齢 80 に達した高千穂にはさすがにきつかったようだ。そこで高千穂は籐椅子に座り、その籐椅子の両側に太い竹を結び付け、前後より人に担がせて神社に行き、神主としての役目を果たした。豊前坊高住神社の近くに住んでいる現在 80 歳以上のお年寄りの中にも、高千穂宣麿がかごに乗って高住神社の方へ向かっていた姿を記憶し、「子供心に素敵に見えた」と回顧される方がいる。

大東亜戦争中、高千穂は月に一度か二度ぐらいの頻度で研究所をふらりと訪問した。彼は研究所に来訪すると、置かれていたスタッフ日誌や来訪者の執筆帳を丹念に読む事を大変楽しみとしていた。高千穂は自らが設立した研究所が昆虫学の発展に確実に貢献しており、また伊藤博士を始め若い昆虫学者が英彦山をフィールドとして育ちつつある事に、無上の満足感を得たのであろう。

IX. 最後に

筆者は帝国議会特別委員会の記録から「国立自然史博物館を作るべし」との高千穂の卓見を引っ張り出す事ができた。これは博物学者・高千穂宣麿の大いに再評価すべき点である。もっとも、国立自然史博物館構想については、高千穂はまがりなりに貴族院議員との立場にありながら、その権限を行使して構想の実現化に最大限努力したとは言えない。無責任な放言に終わったのが実情である。この点は彼が良くも悪くも学者であって根回しを必要とする政治家の資質を持たなかったが故であり、高千穂の過大評価は慎みたいところである。

一方、筆者は保科（2015）で『鶯嶺仙話』の貴族院議員時代の記述の嘘や隠し事を徹底的に暴いてしまった。当然、高千穂本人としては後世明るみに出して欲しくなかった事も多く含まれているに違いない。

筆者は高千穂宣麿の事績を史的に調べあげると同時に、彦山生物学研究所の裏庭で捕れた未記載種をタカチホヒメコケムシと名付けた（Hoshina, 2015）。高千穂に対し後ろめたい事をしてきたからである。新種の昆虫に献名した事により、故高千穂宣麿先生からは多少御目こぼし頂けたであろうか。

末筆ながら、高千穂の後妻的立場にあった女性について言及しておこう。彼女は宣麿亡き後も長く彦山生物学研究所に出入りし、同所スタッフや昆虫採集に来た九大生たちを陰に陽に支え続けた。地元の英彦山では彼女に対する見方は一様ではない事情をよく承知しているが、少なくとも九大昆虫学教室に限っては彼女から受けた恩義を次世代に必ず伝えていくべしと筆者は切に願う。

X. 謝辞

本稿を執筆するにあたり、貴重資料を閲覧する機会をくださった英彦山神宮の高千穂秀敏宮司と、戦争中の談話をしてくださった伊藤修四郎大阪府立大学名誉教授、貴重な写真を提供してくださった江崎家親族の江崎悌一氏と鈴木瀬奈氏に厚く御礼申し上げる。さらに、種々御助言をいただいた九州大学農学部昆虫学教室の山口大輔氏と九州産業大学の須永敬准教授にも重ねて御礼申し上げます。

XI. 参考文献

保科英人, 2015. 博物学者高千穂宣麿先生小傳. 日本海地域と自然と環境, (22): 133-224.
 Hoshina, H., 2015. A new species of the genus *Euconnus* (Coleoptera: Staphylinidae: Scydmaeninae) from Northern Kyushu, Japan. Japanese Journal of systematic Entomology, 21: 195-197.
 霞会館諸家資料調査委員会編, 1985. 華族制度資料集. 吉川弘文館. 428 pp.
 小西正泰, 1990. 高千穂宣麿. 彦山の神宮ナチュラリスト. 科学朝日, 50 (9): 82-86.
 倉田公裕・矢島國雄, 1997. 新編博物館学. 東京堂出版. 408 pp.
 酒巻芳男, 1987. 華族制度の研究. 社団法人霞会館. 448 pp.
 須永敬, 2015. 明治初年の英彦山神社協会設立に関する一考察. 一壱岐の旧英彦山派修験との関係から一. 九州産業大学国際文化学部紀要, (62): 13-25.
 衆議院・参議院編, 1990. 議会制度百年史. 貴族院・参議院議員名鑑. 衆議院・参議院. 481 pp.
 高千穂宣麿, 1946. 鶯嶺仙話. 九州帝国大学附属彦山生物学研究所. 130 pp.

XII. 資料

「男爵高千穂宣麿犯罪處分ノ件」

公文雑纂 明治二十二年 第十一卷 司法省一
 (国立公文書館整理番号 本館一2A-013-00 纂 00128100)

司法省刑乙第六二八号
 華族犯罪處分之儀ニ付上奏
 福岡懸豊前國田川郡彦山村大字
 彦山華族
 英彦山神社宮司男爵高千穂宣麿

右之者無免許ニテ銃獵ヲ為シ又ハ銃獵禁制ノ場所及ヒ人家接近ノ場所等ニ於テ銃獵ヲ為シタル事件ニ付福岡始審裁判所小倉支廳檢事藤崎又三ヨリ別紙之通具申有之候ニ付相當ノ處分ヲ致度明治十六年三月三十一日ノ伺ニ對スル太政官御指令ニ依リ此段上奏候也

明治廿二年七月十五日
 甲三五六 (朱筆)
 司法大臣伯爵山田顯義 (朱印)

 檢事一一四一號
 福岡懸豊前國田川郡彦山村大字
 彦山華族英彦山神社宮司
 男爵高千穂宣麿
 右之者明治二十一年四月中無免許ニテ銃獵ヲ為シ且明治二十二年中免許ヲ得タル後銃獵禁制ノ場所并ニ人家接近ノ場所等ニ於テ銃獵ヲ為シタル事件目下豫審中ニ有之右ハ罰金ノ刑ニ該ル可キモノニ有之候得共事實煩雜ニ涉リ被告人ノ出廷必要ニ付明治十六年本省丙第二號達ニ據リ此段其狀及候条至急何分ノ御指揮相成度候也
 明治廿二年六月廿六日
 福岡懸輕罪裁判所小倉支廳
 檢事藤崎又三 (朱印)
 司法大臣伯爵山田顯義殿

 男爵高千穂宣麿犯罪處分ノ件
 上奏裁可ヲ經タリ
 明治廿二年七月十七日
 内閣總理大臣伯爵黒田清隆

 司法大臣上奏男爵高千穂宣麿犯罪處分ノ件
 右謹テ奏ス
 明治二十二年七月十六日
 内閣總理大臣伯爵黒田清隆 (花押)

 司甲三五六 (朱筆)
 明治廿二年七月十六日 内閣書記官 (朱印)
 内閣總理大臣 (花押) 内閣書記官長 (朱印)
 司法大臣上奏男爵高千穂宣麿犯罪處分ノ件
 別紙司法大臣上奏英彦山神社宮司男爵高千穂宣麿犯罪處分ノ件ハ左ノ通指令可相成哉
 指令案
 男爵高千穂宣麿犯罪處分ノ件上奏裁可ヲ經タリ
 明治二十二年七月十七日 (朱印)
 宮内省へ通牒 (朱印)

表1 高千穂宣麿の履歴

和暦	西暦	年齢	事項
元治元年	1864年	0歳	清華家の一つである徳大寺家の次男として京都に生まれる。父は実則
明治3年	1870年	5歳	祖母や侍女らとともに、東京大名小路の邸宅へ移住する
明治5年	1872年	7歳	明治7年まで訓蒙学舎で学ぶ。特にドイツ語の習得に励む
明治7年	1874年	9歳	訓蒙学舎閉校により、同年秋に東京大塚窪町にあった芳野金陵の漢学塾に入塾する
明治10年	1877年	12歳	学習院に入学。同校では中学2級に編入される
明治12年	1878年	13歳	学習院を退学する
明治13年	1880年	15歳	麻布の学農社に入校する
明治14年	1881年	16歳	東京大学予備門入学のため、共立学校に転学する
明治16年	1883年	18歳	英彦山座主家の高千穂家を継ぎ、東京から移住する。すぐに昆虫採集を始める。叙従五位
明治17年	1884年	19歳	華族令制定。宣麿は男爵を授爵する
明治19年	1886年	21歳	高千穂家学校（私塾）落成
明治22年	1889年	24歳	6月、無免許銃猟等の法律違反で処分される。8月、養母の高千穂栄子死去
明治23年	1890年	25歳	上京し、帝大理科大学や農科大学を訪問。箕作佳吉や佐々木忠次郎ら動物・昆虫学者を訪ねる
同年			6月、男爵議員選挙に備えて、英彦山神社宮司辞職を試みるも果たせず。12月、叙正五位
明治24年	1891年	26歳	熊本の中川久知を訪問し、一緒に動植物採集をする
明治25年	1892年	27歳	動物学者の飯島魁と戸田原（現埼玉県戸田市）で狩猟をするが、飯島の技量には高評価を与えず
明治26年	1893年	28歳	英国公使館職員でチョウ収集家のワイルマンが英彦山に来て、ともに昆虫採集をする
明治27年	1894年	29歳	持病療養のため50日間の東京滞在を願い出る。しかし、上京後は浅間山でハードな昆虫採集を決行
同年			浅間山下山後に三浦半島の帝大臨海実験所を訪問する。英彦山不在中に日清開戦
明治28年	1895年	30歳	大本営のある広島へ出張の予定だったが、雪のために取りやめ
明治29年	1896年	31歳	標本商起業を画策する。標本商に出資することになっていた実業家の太田小三郎が英彦山に来訪
同年			結局、標本商開業を断念する。叙従四位
明治30年	1897年	32歳	英彦山神社の近くに実験所を設立することを考え始める。
同年			5月、この年7月実施の男爵議員選挙のため、英彦山神社宮司を辞職。しかし当選は叶わず
明治31年	1898年	33歳	遅くともこの年の早い時期には百葉箱にて気象観測開始。4月、実験所の土工事開始
同年			10月、英彦山神社宮司に復職
明治32年	1899年	34歳	1月、実験所の建物の棟上が完了。3月、昆虫学者の名和靖が九州へ来訪
明治33年	1900年	35歳	高千穂昆虫学実験所を発足させる。6月、桑名伊之吉来訪
同年			10月、北九州巡啓中の嘉仁皇太子奉迎のため小倉へ出張
明治34年	1901年	36歳	米国留学中の桑名伊之吉と昆虫学実験所の運営方針について書簡にて協議
明治35年	1902年	37歳	帰国した桑名伊之吉を迎え、実験所を九州昆虫学研究所と名を改める。叙正四位
明治36年	1903年	38歳	桑名伊之吉が農商務省農事試験場に引き抜かれるが、屈せず昆虫の飼育や採集を続ける
同年			4月、大阪で開かれた第五回国内勧業博覧会を見学する。12月、大分県鉄輪温泉で三週間の静養
明治37年	1904年	39歳	日露戦争勃発。「皇威宣揚敵国降伏ノ祈願祭」など戦争に関係する神社業務をこなす
同年			7月、貴族院議員選挙が実施されるが、高千穂は議院入りに向けた活動を行わず
明治38年	1905年	40歳	祖父徳大寺公純の23回忌の法事参列のため上京
明治39年	1906年	41歳	明治三十七八年事件の功により勲六等瑞寶章を授けられる。植物学者牧野富太郎が英彦山に来訪
明治40年	1907年	42歳	1月、神経衰弱により神戸須磨で静養。4月、福岡県果物会の名誉会員となる
同年			8月、貴族院議員に選ばれる。英彦山神社宮司を辞任するとともに研究所を閉鎖、上京する
同年			12月、第24回帝国議会開会。政治会派・木曜会に所属する

和暦	西暦	年齢	事項
明治 41 年	1908 年	43 歳	上京後時期不明ながら渋谷に居を定める. 大正 8 年まで西ヶ原の農事試験場で害虫を研究する
明治 43 年	1910 年	45 歳	2月, 華族談話会記念会に出席する. 直後に所属会派の木曜会が大分裂
明治 44 年	1911 年	46 歳	貴族院伯子男爵議員任期满了. 高千穂は議員職を失う
同年			東京帝室博物館に嘱託として出仕. 叙従三位
大正元年	1912 年	47 歳	韓国併合記念章を授与される. 遅くともこの年 6 月までには, 渋谷から田端へ居を移す
大正 4 年	1915 年	50 歳	大禮記念章を授与される. 田端から駒込へ居を移す
大正 6 年	1917 年	52 歳	2月, 貴族院の有力議員の田健治郎に議員推挙を依頼する.
同年			この年 3 月の東京昆虫学会創立に対し援助をする
同年			6月, 東京帝大で開かれた東京昆虫学会例会に出席する
大正 7 年	1918 年	53 歳	貴族院伯子男爵議員任期满了に伴う選挙で貴族院議員に復帰する
同年			12月, 第 41 回帝国議会開会. 政治会派・茶話会に所属する
大正 8 年	1919 年	54 歳	男爵議員会派の公正会創立. 高千穂は茶話会から公正会に移る
同年			叙勲五等授瑞寶章を授与される
大正 9 年	1920 年	55 歳	大正四年及至九年事件の功により銀杯一組を賜る
大正 10 年	1921 年	56 歳	叙勲四等授瑞寶章. また, 国勢調査記念章を授与される
大正 11 年	1922 年	57 歳	公正会から親和会に移る
大正 12 年	1923 年	58 歳	親和会は解散し, 高千穂は他の同会所属男爵議員と共に研究会に移る
大正 13 年	1924 年	59 歳	東京帝室博物館の臨時天産部列品整理掛の整理顧問となる. 叙正三位
大正 14 年	1925 年	60 歳	4月, 高千穂ら 15 名の男爵議員は研究会を脱会する
同年			7月, 貴族院議員の任期满了. 高千穂は議員再選を望むも叶わず. これで議員生活を終える
大正 15 年	1926 年	61 歳	遅くともこの年の後半には東京から福岡に引き揚げる
同年			英彦山神社で施行された大正天皇平癒祈願祭に列席する
昭和 3 年	1928 年	63 歳	九州帝国大学農学部で日本動物学会大会が開かれ, 会議議長に選ばれる
同年			福岡県の測候所の嘱託となり, 気象観測に従事する. 大禮記念章を授与される
昭和 4 年	1929 年	64 歳	英彦山に初めて電燈がつく. 夜間の灯火に集まる蛾の採集に没頭する
昭和 6 年	1931 年	66 歳	帝都復興記念章を授与される
昭和 7 年	1932 年	67 歳	植物学者の牧野富太郎が植物採集のため英彦山に来訪. 自らの邸宅で記念撮影をする
昭和 8 年	1933 年	68 歳	70 歳の高齢に達したことに対し, 御紋付銀盃一組と酒肴料を下賜される
同年			地質学者の脇水鐵五郎とともに耶麻溪彦山火山の地質調査を行う
昭和 10 年	1935 年	70 歳	膨大な標本と共に私有地約一万坪を九州帝国大学に寄贈する
昭和 11 年	1936 年	71 歳	寄付された私有地に九州帝大附属彦山生物学研究所が完成
同年			高千穂は研究所の一員として研究を続行する. 叙従二位
昭和 15 年	1940 年	75 歳	紀元二千六百年祝典記念章を授与される
昭和 16 年	1941 年	76 歳	九州帝国大学農学部昆虫学教室を訪問する
昭和 18 年	1943 年	78 歳	80 歳の長寿に達したことに対し, 御紋附木盃一組と酒肴料を下賜される
同年			九州帝大の江崎悌三教授が高千穂を訪問. この 2 人の会談が自伝『鶯嶺仙話』出版の切っ掛けとなる
昭和 21 年	1946 年	81 歳	自伝『鶯嶺仙話』が九州帝国大学附属彦山生物学研究所から出版される
昭和 22 年	1947 年	82 歳	日本国憲法施行により華族制度廃止
昭和 24 年	1949 年	84 歳	日本昆虫学会の名誉会員となる
昭和 25 年	1950 年	85 歳	12月 23 日 86 歳で死去

※年齢は, その年の元旦時における満年齢. 旧暦から新暦への変換はしていない.